

学術的内容の高度専門化に伴う 聴覚障害者の手話通訳に対するニーズの変化

○ 石野麻衣子¹ 吉川あゆみ² 松崎 文³ 白澤麻弓¹ 中島亜紀子¹ 蓮池通子¹ 中野聡子⁴ 岡田孝和² 太田晴康⁵
 (筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター¹ 日本社会事業大学² 宮城教育大学³
 広島大学アクセシビリティセンター⁴ 静岡福祉大学⁵)
 KEY WORDS: 高等教育 高度専門化 手話通訳

I. 問題と目的

高等教育における手話通訳は、聴覚障害者のニーズや通訳技術の妥当性の検証が不十分であり、これらの解明が急務の課題である。この課題に対し、手話通訳利用者の技術的ニーズに関して、大学在籍経験がある利用者は「日本手話の文法を借用した表現に対する期待」だけでなく、「談話内容をなるべく忠実に伝える通訳」への要求が高いとされる(白澤, 2006)。また、大学院修了者における手話通訳のニーズを踏まえて手話通訳評価項目の試案作成を試みた研究では、評価すべき項目が①通訳技術、②表現技術、③講義に応じた技術(翻訳)の3つに大別されたとの報告がある(吉川他, 2010)。

しかし、学士課程教育から大学院教育へと扱う学術的内容の専門性が高まるにつれて、求められる手話通訳像も変化することが予想されるものの、その詳細は明らかでない。そこで本研究では、高等教育における学術的内容の高度専門化に伴う聴覚障害者の手話通訳に対するニーズの変化を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1) **モデル手話通訳映像の収録**: N 大学で行われた「哲学」の授業(約9分間)を手話通訳者 A~D の4名が通訳し、収録した。分析にはこのうち同一起点談話の約4分間を使用した。手話通訳者は全員手話通訳士資格を有し、高等教育機関での通訳経験を有する者であった。異なる特徴を持ったモデル手話通訳映像を収集するため、手話通訳者には被通訳者は学部生と大学院生の2群であると想定し、各群への手話通訳をしてもらい、映像を収録した。その映像資料から、用いている手話の特徴と、原文から手話へ変換する際の細部の再現性の観点で、異なる特徴を持った7つの通訳パターンを偏りのないように選択し、モデル手話通訳とした。また、同一通訳者によるモデル手話通訳が2つある場合は、B-1、B-2などと分けてナンバリングし、これらのモデル手話通訳をまとめて示す場合は通訳 B、通訳 C、通訳 D とした。

2) **手話通訳評価表の作成**: 大学院における手話通訳の評価項目試案(吉川他, 2010)を元に、手話通訳評価表を作成した。設問 21 問の内訳は、①通訳技術「全体像の把握(3項目)」「見やすさ(4項目)」、②表現技術(3項目)、③講義に応じた技術(翻訳)「情報量・忠実さ(3項目)」「論理や態度の伝達(4項目)」「語彙選択(2項目) ④総合評価(2項目)となった。評価は5段階評価で行った。

3) **聴覚障害者による評価**: 属性群は、学部生、大学院生(修士課程)、大学院生(博士課程)の3つとした。対象者は、学部生7名、大学院生(修士課程)6名、大学院生(博士課程)3名であり、全員授業において手話通訳を受けた経験がある者であった。ただし、現役 of 学生が少数であるため、修了者も含めるものとした。

評価の方法は、1パターンのモデル手話通訳映像約4分間を見終えた後で手話通訳評価表に記入することとし、休憩を挟んで7パターン繰り返した。通訳映像の提示順序については、音声日本語の語順に最も忠実に手話を出した通訳 A-1 から始め、日本手話文法を多用し、最も原文の表現型から距離のある表出を行った通訳 D-2 を最後とした。

4) **分析**: 各評価項目の平均を属性ごとに算出した。

III. 結果と考察

1) **総合評価**: 全属性で通訳 C、通訳 D の評価が高く、通訳 A、通訳 B の評価が低かった(図1)。特に、通訳 A は最も評価

が低く、これは、音声日本語の語順でほぼ忠実に手話で表出した通訳だった。これまで高等教育機関における手話通訳は、一般的に、音声日本語の語順通りに手話を出している通訳が適していると考えられがちで、特に手話を習得して間もない学部生は顕著であると思われる傾向が強かったが、実際のニーズは異なっていることが考えられる。

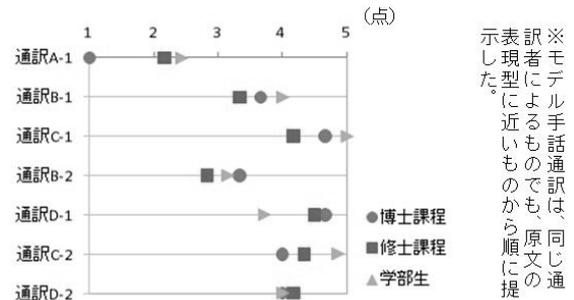


図1 総合評価(通訳を通じた講義理解)

2) **各属性群の傾向**: 学部生は他属性群と比較して、通訳 C の総合評価が高かった。大学院生(博士課程)の評価が高い通訳 D と比較すると、「見やすさ」の下位項目であるリズム・イントネーションや、CL・非手指動作・リファレンシャルシフトといった「表現技術」、「論理や態度の伝達」の下位項目である話者の態度の伝達に関する項目で、通訳 C が通訳 D の評価を上回った。また、学部生の自由記述の中には「動きが大きい方がわかりやすい」との記述が複数見られた。一方、大学院生(博士課程)では、下位項目を見ると通訳 D の評価が高かった。通訳 C と比較すると、「見やすさ」の下位項目であるリズム・不自然な繰り返しの有無・手話として自然な文になっているか否か、及び「表現技術」が上回った。評価後のヒヤリングでは「通訳 C は表情が豊かすぎる」「通訳 D は見えていてスムーズに講義内容を理解できた」との発言が見られた。さらに、大学院生(修士課程)では、通訳 C と通訳 D への評価がほぼ同等であった。

このように、学部生は、表現技術をより強調して表出する通訳を求める傾向があり、大学院生(博士課程)は、強調された表出が逆に不自然に感じられ、より自然な表出を求めるとともに論理や態度の伝達の質も要求する傾向が高いことが明らかになった。さらに、その中間に位置する大学院生(修士課程)は両方の要求内容をほぼ同等に位置づける傾向があることから、学術的内容の高度専門化により、聴覚障害者のニーズが段階を踏んで変化していくのではないかと考えられた。

今後は、モデル手話通訳の訳出を分析し、上記の結果と併せて検討することで、聴覚障害者のニーズの変化に応じるための手話通訳技術をより具体的に明らかにしたい。

附記: 本研究は日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)情報保障評価事業の一部である。

(ISHINO Maiko, YOSHIKAWA Ayumi, MATSUZAKI Jo, SHIRASAWA Mayumi, NAKAJIMA Akiko, HASUIKE Michiko, NAKANO Satoko, OKADA Norikazu, OHTA Haruyasu)